

美術館は2月25日から休館しています。私たちスタッフも3月までは出勤していたものの、4月の緊急事態宣言が出されてからは在宅勤務が始まりました。接客という直接人と向き合うことが仕事なのに、それができない状況になってしまったのです。メールやオンラインでの会議を中心とした方法に切り替わり、自宅にいなから人とつながれる便利さや安心感を実感しつつも、仕事であれ何であれ、自分以外の誰かに接することで得ていたものがあるのだと改めて思いました。誰かと話をする事で気づけることや、そばで仕事をする事で学んでいくことなど、考えればいくつも出てくるけれど、どれも普段は意識していません。そんなことをふと考えた在宅勤務期間でした。

さて、美術館の休館は続いてはいますが、この季刊トライホークスは、ページは減りますが制作していく予定です。59号からはPDF配信も行っています。しばらくは家にいる時間が長い中、本を選ぶきっかけにいただけたら嬉しく思います。



季刊トライホークス 2020年 | 60号

発行日……2020年7月15日 | 発行人……中島清文

発行所……徳間記念アニメーション文化財団

東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館

編集……石光紀子 机ちひろ | デザイン……川島弘世

印刷……図書印刷株式会社 | 非売品

本棚より

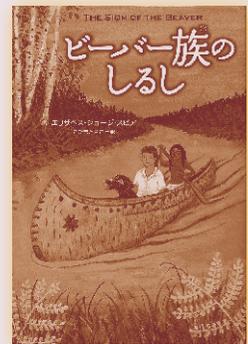
トライホークスに置かれているおすすめの本を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にいただけたら嬉しいです。

ビーバー族のしるし

物語の舞台は、白人に開拓された18世紀後半のアメリカ・メイン州。13歳のマットと父親は、春に川沿いの森に入植すると、土地を切り開き丸太小屋を建て、畑を耕しました。やがて父親は残してきた家族を迎えに行くため森を離れ、留守を任されたマットは、ミツパチに襲われているところを、先住民族（インディアン）であるビーバー族の少年エイティアンとその祖父サクニスに助けられます。

サクニスの依頼でマシューはエイティアンに英語を教えますが、エイティアンからはウサギの罾や釣り針の作り方、森の中で迷わない術などを教わります。どれも大自然にあるものを使うやり方で、マットは先住民族たちの知恵に敬意を持ちます。やがて、マットはエイティアンの村に招かれますが、白人がエイティアンの家族を殺し、彼らの狩場を奪っている事実をつきつけられ、心を痛めます。

著者のスピアは、歴史上の出来事を題材にした物語をいくつも発表し、本作では白人に住む場所を追われた先住民族たちの厳しい生活にも触れています。マットとエイティアンのように、異なる価値観や言葉を持つもの同士が出会い、理解し、互いを思うようになるのは難しいことですが、少年たちの素直ですこやかな様子や、反発を感じつつも友情を育む姿が心にしみみます。文化的背景の違いから起こる多くの争いを知る私たちも、2人のようになれたらいいのに、と思わずにいられません。



ビーバー族のしるし

著者……エリザベス・
ジョージ・スピア

訳者……こだまともこ
あすなる書房 1,500円

西巻茅子

Kayako Nishimaki

夢中になって読んだ本

1969年初版の『わたしのワンピース』。50年以上親しまれてきたこの本は、今でも図書室でたくさん子ども達に読まれています。たくさん手に取られると本も少しずつ傷んでしまうので、何度も新しい見本を作ってきました。今回は、この絵本の作者である西巻茅子さんに、今まで出会い、何度も読んだ本を紹介していただきました。



撮影…黒澤義教

* * * * *

私は、芸大でグラフィックデザインを専攻したにもかかわらず、卒業する頃にはデザインという仕事が自分に向いていないような気がして、どこにも就職せずにフリーターになってしまった。

子どもに絵を教える教室を開いたり、雑誌のレイアウトやイラストレーション等のアルバイトをしていた頃に、たまたま、きれいな絵だと思って買ったのが、長新太の『いそっぷのおはなし』と田島征三の『ふるやのもり』であった。こんな風な絵を描いてもいいなら、絵本という場所で仕事をしたいと思ったのである。取りあえず自分の作品を作ろうと思って始めたリトグラフが縁で、こぐま社に出合った。こぐま社は、日本の作家のリトグラフで絵本を作ろうとして立ち上げて2年目の小さな出版社であった。

こぐま社に行ってみたら、いきなり「絵本を作りますよ。何でもいいから好きな絵を描いていらっしやい」と言われて驚いてしまった。私は絵本というものも先の2冊しか見たこともなかったし、子どもの本というものを全く知らなかったのだ。

私は戦後すぐの昭和21年に小学校に入学したので、絵本どころか教科書さえなかった時代の子

どもだったのだ。そう言われて、子ども時代を思い出し、裁縫道具のいろいろとボタンを楽しそうに描いてこぐま社に持っていった。母が洋裁をしていたので裁縫道具やボタンは子ども時代のおもちゃだった。それから、いろいろ教えて貰いながら4ヶ月で私の初めての絵本『ボタンのくに』は出来上がったのである。絵本が出来上ってから、私は1枚1枚の絵が作品なのではなく、1冊丸ごとがひとつの作品なのだということが分った。

その後、こぐま社にある沢山の内外の絵本のコレクションを見せて貰えるようになり、初めて絵本について勉強をしたのである。沢山の絵本を見た中で、後に至光社で翻訳された、レオ・レオニの『あおくときいろちゃん』はいろんな意味で私に衝撃を与えた。

「あおくんです」という短い文章に青い丸い絵が描いてあるだけで始まり、ちぎり絵の様な単純な抽象画と短い文章だけで出来ている。しかし、心をゆさぶられるストーリーなのである。あおくんはきいろちゃんとなかよしで、だきあうとみどりになるというところは、本当に素敵で、当時、デザインを学んでいた者にとっては、ああ、と驚く展開なのである。絵本は、やっぱり絵で出来ているという確信を持たせてくれた絵本であった。

絵本を描き出して3年後には、長男が、次の年には長女が生まれ、今度は子ども達に絵本を読んでもやるという経験に恵まれることになった。下の子が1才の頃から毎晩、私をまん中に3人が並んで寝て、3冊の本を読んでやるという習慣ができた。子どもはそれぞれ今夜読んで貰いたい本を選び、私も読んでやりたい本を選ぶという方法だった。我家には頂いた本や私が買った本が沢山あって、本棚の下の段に入っていた。子ども達は毎晩同じ本を持ってくることもあり、兄弟が代りばんこに同じ本を持ってくることもあった。子どもは気に入った本を何度も何度も読んで欲しいのだった。私は、私の気に入った絵のきれいな本を選んでやった。

そんな経験を4年位続けて、その頃よく読んだ本を今改めて見てみると、やはり、いい本ばかりなのである。子どもの選ぶ目は、すごいなあと感じてしまうのである。

何度も何度も読んだ本の中で私の1番好きな本は『あおい目のこねこ』である。文章の量は少ないけれど、100頁もある厚い本である。青い目の猫と黄色い目の沢山の猫との目だけに色がついていて、あとは墨1色で描かれているおしゃれな冒険の話である。絵で語っている冒険は楽しく長さを感じさせない絵本である。

『しずくのぼうけん』も、私も子ども達も好きな絵本だった。リズムカルな文章にきれいな色とデザイン的な絵が相まって、読んでやるのが楽しい

本であった。

しかし、何といても我家の子ども達のお気に入り、かこさとしさんのいくつかの本であった。『はたらいちゃったどうぐちゃん』（あい書房。現在は『まさかりどんがさあたいへん』に改題して小峰書店）は、横に細長い小さな本だったが、雑誌の下の方を切り取ったもので、あの小さな本は、何度も読んだのでボロボロになってしまった。同じかこさとしさんの本で『ことばのペンキょう』『だるまちゃん と てんぐちゃん』『だるまちゃんとかみなりちゃん』も何度も読んだか判らない。私は絵が好きではないのだが、子ども達があまりにもかこさとしさんの絵本が大好きなので、絵本作家の私としては、かこさとし研究をせざるを得ないことになった。

西巻茅子

1939年、東京に生まれる。東京芸術大学工芸科卒業。大学卒業後、リトグラフを学び、日本版画協会展に出品。新人賞、同奨励賞を受賞。1967年『ボタンのくに』（なかむらしげお文）で絵本デビュー。代表作『わたしのワンピース』（以上、こぐま社）は、親子孫三代にわたるファンも多い。『ちいさなきいろいかさ』（もりひさし文/金の星社）で第18回産経児童出版文化賞受賞。『えのすきなねこさん』（童心社）で、第18回講談社出版文化賞絵本賞受賞。



トライ
ホークス
の本
わたしのワンピース
絵と文…にしまさかやこ
こぐま社 1,100円

[..... 夢中になって読んだ本]



あおくと
きいろちゃん
作…レオ・レオーニ
訳…藤田圭雄
至光社
1,200円



あおい目のこねこ
作…エゴン・マチーセン
訳…瀬田貞二
福音館書店
1,200円



しずくのぼうけん
作…マリア・テルリコフスカ
絵…ボフダン・ブテンコ
訳…うちだりさこ
福音館書店
900円



ことばのペンキょう
1~4
文・絵…かこさとし
福音館書店
各600円



だるまちゃん と
てんぐちゃん
作・絵…かこさとし
福音館書店
900円

〔連載……第1回〕清水真砂子さんと読む『ゲド戦記』

『ゲド戦記』と出会った頃

『ゲド戦記』（全6巻）ほど、この日本語版シリーズのタイトルゆえに長年、多くの人々に誤解され続けてきた物語は他にないかもしれない。書店の、あるいは図書館の書棚にこのタイトルを見つけて、伸ばしかけた手をひっこめたり、そもそもの初めから手を伸ばさずに終わった人のいかに多かったかを、私はさまざまところで気づかされてきた。このタイトルを見た人の中には、たとえば『ガリア戦記』を思い浮かべた人がいたのではなかったか。そこまでいかになくとも、戦場の武器のふれ合う音を聞くのかと思った人は少なからずいたに違いない。

ところが実際にはまるで違った。どんなふうにか？
『ゲド戦記』とはいったい何だったのか。私自身いま一度自らの言葉で考えてみたいと思う。

第1巻の『影との戦い』（A Wizard of Earthsea）の日本語版の出版は1976年9月24日。それはミヒヤエル・エンデの『モモ』の日本語版出版と同じ日で、出版社も同じ岩波書店だった。

私自身のこの本との出会いは原書出版4年後の1972年。定期購読していたアメリカの児童文学関係の書評誌に見つけて、丸善に取り寄せを頼んだのだ。今では海外の本の取り寄せにかかる時間はずっと短くなり、送料も、場合によっては払わずにすむ場合もあるが、当時は航空便での送料は船便の3倍で、月給が2万円をわずかに超す県立高校教員の私に、それを払う余裕はなかった。

その春、私は教職に就いて9年目。3つ目の高校に転勤したばかりで、担任した1年生のクラスの生徒は男女共おむね穏やかで、親御さん達にもあたたかくサポートされ、教員になって初めてといていい、平穏な落ち着いた日々を過ごしていた。

2学期が始まって間もなくだったろうか。ある夕方、ひとり暮らしの6畳1間のアパートに帰宅した私は郵便受けに本とわかる包みを見つけた。丸善に頼んだ本にしては到着が早すぎる?! 差し出し人は岩波書店児童書編集部の人だった。包みを開けると、なんとA Wizard of Earthseaが出てきて、同封の手紙には、この作品を読んでみるように、との短い言葉があった。それは装丁の美しいカリフォルニアのParnassus Press版で、遅れて「丸善」経由で届いた私の本は、ロンドンでその年出版された少し小型の地味

なつくりの版だった。

私は、けれど、岩波書店の印の押してある美しいテキストは脇に置いて、自分で買い求めた本を読みだした。80代に手の届く今でもそうだが、つつい傍線を引いたり、書き込みをしたくなったりしてしまう私は、借りた本はどうにも落ち着いて読めないのである。というわけで、パルナサス版との念のための照合は、ひととおり訳しおえた後だったと記憶している。

さて第1巻を読みすすむうち、私の中にはこの作品をどうしても訳したいとの思いがぐんぐん募っていった。問題は教員の仕事との両立ができるか、ということだった。実はこの前年、私は「石井桃子論」（明治書院1973年刊「講座日本児童文学」第8巻『日本の児童文学作家3』所収）を書いていて、毎日学校に出勤しながら集中を持続させることが、いかにむずかしいかを痛感していたからである。加えて私は高校3年の夏、難病といわれるネフローゼで1ヶ月あまり入院、さらに2ヶ月自宅での安静を続けるという体験をしていて、卒業も大学入試もなんとか遅れずにパス。さらに4年後の教員採用試験の健康診断もぎりぎりパスして、自活の道は辛うじて拓かれていたものの、無理のできないからだであることは重々わかっていたからである。

もはや二者択一だった。経済的安定が保障され、かつこちらの生き方が問われ、試される生徒たちとの楽しくも緊張した日々を手放すか、この翻訳の仕事をあきらめるか。この迷いの中でひとつだけはっきりしていたこと。それは、「もしも出会ったこの作品を訳さなかったら、死ぬ時、絶対後悔する。」だった。

「先生、ずっと迷ってたよネ。」学校を去る決意をクラスの生徒たちに伝えた日の放課後、1人の男子生徒が掃除の最中、ポツンと言った。見られていたか、と思った。

私はクラスの生徒たちにヴェルコールの『海の沈黙・星への歩み』（岩波文庫）を1冊ずつ贈って、1973年春、遠州森町の高校を去った。

（児童文学者・翻訳家
清水真砂子）



影との戦い ゲド戦記1
著者…
アーシュラ・K.ル・グウィン
訳者…清水真砂子
岩波少年文庫 720円